

弥生散策 | キャンパスを歩き、街を訪ねる。

ボランティアサークル「まदै」の活動を見学し、分子育種研究室の日高真誠准教授と根津の居酒屋を覗く。



火曜日の午前中までに届けられた土や苔などがバイアルと呼ばれる試料瓶に詰められていく。作業は常時、10人ほどが集まって行われる。



手間ひま惜しまず

ボランティアサークル「まदै」が誕生したのは東日本大震災から約1年半後の2012年秋。福島県飯館村の産業や生活の再生を支援するNPO法人「ふくしま再生の会」から、飯館村で採取された土壌や苔などの分析をしてほしいとの依頼がRI施設を備える農学部に入ったのがきっかけだった。

しかし、解決しなければならぬ問題があった。土や苔をバイアルと呼ばれる試料瓶に詰める面倒な作業を「誰が」、「どこで」行うのか。事情を知るや、即座に行動したのが農学部職員を中心とする有志たちだ。職員用サークル室を使って、作業を自分たちが手分けして行うことを買って出たのである。ただし、サークル室を使う以上、新たにサークルを立ち上げ、大学に申請しなければならない。それが「まदै」だった。「まदै」とは「まじめに」「ていねいに」「手間ひま惜しまず」という意味の福島県の方言だ。

ボランティアサークル「まदै」

震災復興のために役立ちたいという職員有志により2012年11月に発足。現在は学生や「ふくしま再生の会」在京メンバーも加わり、農学部サークル室で、飯館村で採取した検体の測定サンプルの作成を行う。



Madaei is a dialect of Fukushima to mean "earnestly" and "heartfully".

サークル室で始まった活動は文字通り「まदै」な取り組みが求められた。土や苔、ときには試験栽培した米などを瓶に詰め、番号を振り、質量を測定。さらに「いつ、どこで、どんな条件で採取されたか」を記録するデータベースの作成が「まदै」の役割だ。すでに測定した試料瓶は1万3000本を超える。

メンバーは職員とそのOB、学生、研究者、「ふくしま再生の会」のメンバーら約30人。当初、昼休みや終業後に行っていた作業は、現在、毎週火曜日午前中から1日ばかりで行われる。「学生を除けば、平均年齢は60代半ばでしょうかと、世話人を務める齋藤富子さんは笑うが、皆さん、若い。澆刺として。活動もサンプルの作成にとどまらず、放射線の講義など月に1度の勉強会も開いている。この行動力、好奇心、探究心。「まदै」の心はこの先もずっと受け継がれていくはずだ。



世話人の齋藤富子さん。土壌が入った筒を20mm単位で切る工具も齋藤さんのアイデアの贈物。

